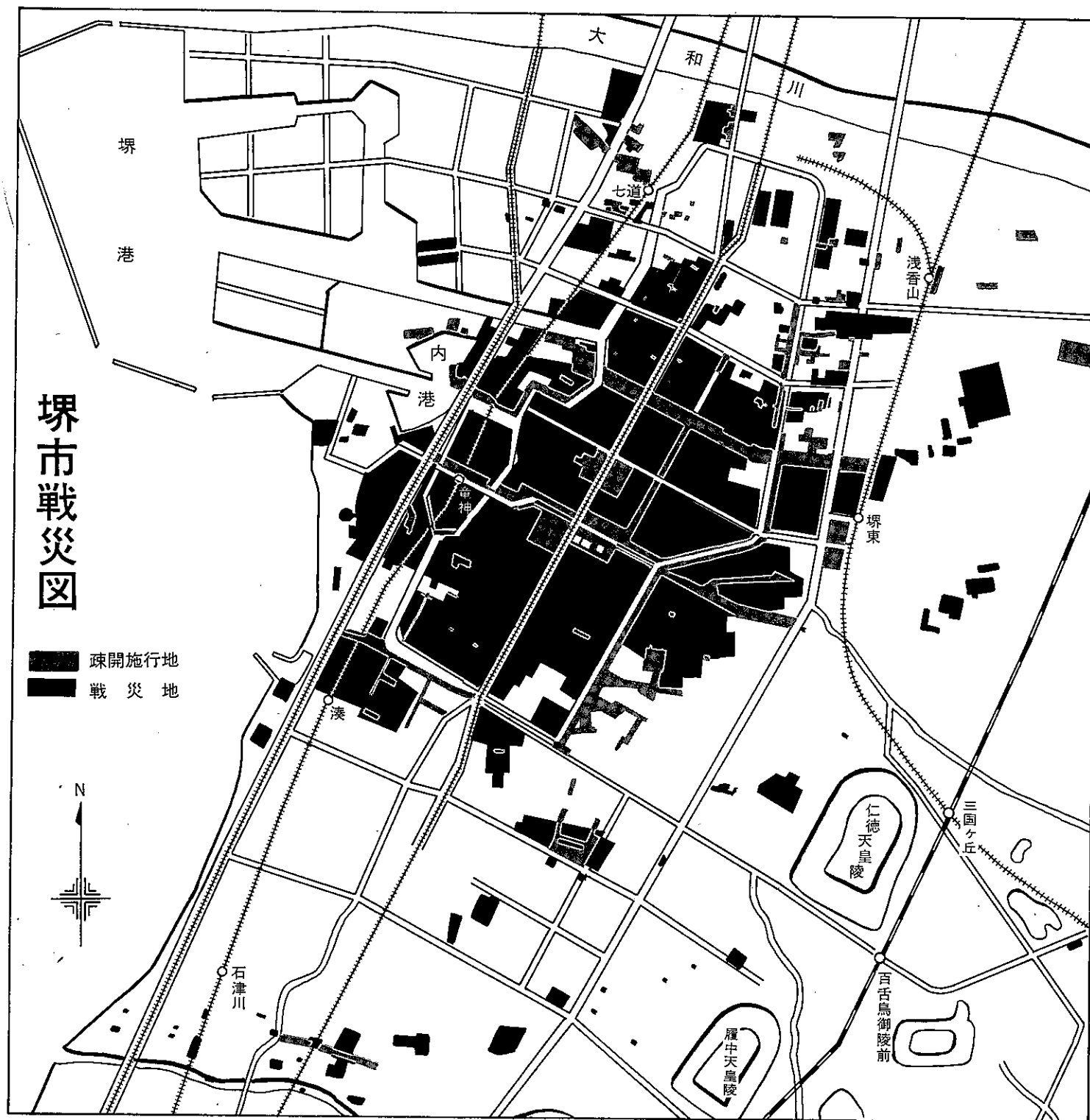


# 空襲

## 五次にわたる空襲

本土空襲は、東京等の大都市から中小都市へと拡大し、堺市もまた前後5回にわたる空襲をうけ、人的・物的に壊滅的な打撃をこうむった。この空襲と戦災の状況については、『堺市制施行七十年誌（昭和33年）』と『堺市史統編第二巻（昭和46年）』がくわしい。

『堺市史統編』のなかから、五次にわたった空襲についての記述を中心に転載した。



『堺市制施行七十年誌』から

## 堺市史統編の記録から

### 五次にわたる空襲

昭和二〇（一九四五）年三月二三日深夜、堺市は突如として阪神各地区とともに米機による空襲を受けることとなり、その後、六月一日、同月二六日、七月一日、八月一日と、連続五回の空襲をこうむり、焼夷弾・爆弾・機銃掃射等により、一万八千戸が焼失あるいは破壊され、七万余人が罹災し、三千になんたんとする多数の死者を出した。以下この酸鼻を極めた空襲の被害、ならびに当時の情勢、および救援の概要を記してみよう。

五回にわたる空襲による被害実数については、堺市防空本部傘下の各種機関がそれぞれ独自の下部組織を通じて調査を行なったが、戦後の混乱時代のことであり、その調査結果は必ずしも一致せず、いずれが正確であるか断定し難いものがある。本書では比較的正確と認められる代表的調査結果を上に掲げる。空襲時の状況ならびに詳細にわたる被害等の記述は、第一次乃至第五次の空襲別に記すことにする。

**第一次空襲** 三月二三日二時〇分、突如中部軍管下近畿地区に警戒警報が発令され、深夜の静寂を破って全市に防空サイレンがけたたましく鳴り響いた。しかしこの頃はほとんど連日のように警報が発令され、警報にはなれていたのと、最初のラジオ放送がB29一機の紀伊水道侵入を告げたのみであったので、市民はいずれも落着いてつぎの情報を待つことにした。

ところが約一〇分後の情報は、意外にも太平洋上を北進するB29の大編隊のあることを告げた。市民は関東地区および中京地区にたいする数日前の夜間大空襲の災害を想起し、慄然として事態が容易でないことを察した。しかもこの情報に引き続いて同二〇分空襲警報が発令され、霧深い深夜の空気をふるわして、臆附までかきみだすような空襲警報の号笛が短く断続して吹き鳴らされたので、各戸では老幼婦女子病人などを急いで待避壕に待避させるとともに、貴重品・食糧包なども壕に投げ入れ、あるいは裏庭に持ち出し、万に備えた。

しかしながら幸か不幸か未だ空襲による恐るべき惨禍を体験したことのない市民の多くは、待避を忘れて戸外にたたずみ、なかには屋根や電柱に登ってB29の来襲をながめる人もあったのである。

太平洋上を北進したB29は、紀伊半島の南端にたどりつくと編隊をとき、一機または二機くらいずつ紀伊水道に入り北進し、順次に紀淡海峡を通過して大阪の上空に殺到してきた。これは空襲警報発令後わずかに二〇分くらい後のことであった。四方から放射する数条の探照灯の光に照射されながら、B29は堺の西北方の上空を次から次へ一機ずつ大阪

堺市空襲被害状況調（市厚生課調査）

被害年月日	身 体 生 命				戸 数					罹災人口
	死 者	重 傷 者	軽 傷 者	計	全 焼	半 焼	全 壊	半 壊	計	
(第1次)20.3.13	人 4	人 8	人 8	人 20	戸 158	戸 38	戸 —	戸 —	戸 196	人 776
(第2次)20.6.15	8	29	28	65	295	136	—	—	431	1,325
(第3次)20.6.26	4	2	8	14	—	—	6	27	33	338
(第4次)20.7.10	1,860	223	749	2,832	18,009	437	—	—	18,446	70,000
(第5次)20.8.10	— 人	1 人	1 人	2 人	— 戸	— 戸	— 戸	— 戸	— 戸	— 人
計	1,876	263	794	2,933	18,462	611	6	27	19,106	72,439

（ただし、死者中には行方不明者を含む）

（註）『堺市史統編第2巻』所収の表に第5次空襲分を加えた。なお、この表の数値は、『堺市史統編』が指摘しており、本文中や他表の数値と一致しないところがある。